

■ 授業者より

- 1 研究について
 - ・問いを生む意図的な仕掛けを工夫した。
 - ・試行錯誤を促したり思考を焦点化させたりするための手立てを具体化した。
 - ・各授業において活用できる言葉の力とは何かを明確にし、評価規準を見取る視点をもった。
- 2 単元について

展開①「考えのすじみちをたどる」

 - ・児童に違和感を感じさせる提示で問いを発生させた。具体的には「中」を省いた提示。

展開②「説明の特徴や工夫に気付く」

 - ・説明の順番に思考を焦点化させることができるように、「読者の予想」と「筆者の考えの予想」を立て内容を読むことで、筆者の考えと説明の順番を結び付けて考えることができた。
- 3 成果
 - ・筆者の説明の順番の意味に気付くなど、「図や写真」に留まらない工夫を考えられた。
 - ・筆者と読者の両方の視点から考えられた。
- 4 課題
 - ・それぞれの立場の人の思考が混同してしまった児童がいる。整理が必要であった。

■ 研究協議（主なものを抜粋）

- ・問いを見いだすことは重要である。想定していなかった問いとはどのようなものか。
 →例えば、「みつというのは、はちみつだったらどうなのだろう。」等の内容のものは、想定していなく扱いきれなかった。
- ・想定していない問いが出てくるのが重要。指導案に書いておくとい。想定外の問いをどう扱うのが大事。
- ・考えたいと思わせる導入の工夫がよい。ICT活用は、ノートとのバランスは難しい。附属の授業からは工夫が見られた。
 →子供たちの方から様々な思考が見られ、成果は感じている。
- ・アナログとデジタルのツールが効果的に使われている。また、子供たちが筆者に対して親しみをもち、筆者になりきって構成をどのように工夫したのかよく考えていた。違う説明文が出てくることは、子供たちはどの段階で知ったのか。
 →『めだか』の説明文については、授業者が出した時点で知った。だが、普段から子供たちは既習を使ったアウトプットに慣れているので、違和感なく受け入れている。
- ・学習計画を子供たちとどのように共有しているか。
 →すべての単元において一律にしていなかったため、今回は取り組んでいない。ねらいによって使い分けることにしている。
- ・記録に残す評価についてどのように考えているか。
 →授業時間の姿や最終的な作成物等、各過程で見取っているつもりではあるが、課題を感じている。

■ 指導助言

上川教育局義務教育指導班 主任指導主事
 望月 俊綱 様

- 1 説明的な文章の授業について
 - ①国語科は言葉そのものを学習対象としている。
 - ・子供たちの発言の中に筆者の伝えようとするこの意図を探る楽しさを感じている姿が見られた。
 - ・子供たちは、説明的な文章の読み方を身に付けていた。
 - ②言葉への自覚を高めること
 - ・子供自身が自ら言葉への関心を高めることが大事。
 - ・例えば「つなぎの言葉」などを先生から発信するのではなく、子供自身が着目して気付いていた。
 - ・子供の思いを大事にしながら言語活動を位置付けることが大事である。
- 2 既習事項の活用について
 - ・説明的な文章は年間3単元。それをつなげるために大切な視点は、指導事項である。
 - ・重点化された指導事項は、横に見るとバランスよく配置され、縦に見ると同時期に同じような配置になっているので、これをうまく使う必要がある。
- 3 言語活動の充実に向けて
 - ・子供たちが、学ぶ目的、意義、楽しさ、価値等を実感できるようにしてほしい。
 - ・本単元では、自らいろいろな説明的な文章を読み表現の類似点を発見する活動をすることで、より強く発信への思いをもたせることができたかもしれない。

■ 指導助言

北海道教育大学旭川校 准教授
 渥美 伸彦 様

<主体には「〇〇」がある>

- ①「目的」～主体者である学習者に目的はあるか。
- ②「脈絡」～学習者の学びに脈絡はあるか。
- ③「思いや願い」～教師の思いや願いだけで授業をしていないか。

- 1 授業を通して
 - ・「目的」は、子供たちの学びの「脈絡」を想定しつつ、何らかの手立てを講じたもたせる必要がある。
 - ・文章の記号内容を受け取るだけではいけない。記号自体の特徴や構成を学ぶ取組が必要。
 - ・複数の説明文を扱い、既習と未習がつけがらわれていた。子供の「脈絡」から学びを生起させるための手立てがあった(知の構造化・活用知の育成)。
 - ・個別最適化を見据えたICTの利活用が見事だった。
- 2 今後の課題として
 - ・「思いや願い」を実現する営みが不足。発達段階に応じた自己調整的な学習をどう実現させるか。
 - ・学びの見通しをもたせる活動にはさまざまなねらいがある。その行為自体を目的化してはいけない。
 - ・筆者の工夫の概念の整理と確かな系統性の把握に基づく指導の展開が必要(用語・解釈の揺れ)。
 - ・質的な整理だけではなく、量的な整理でも成果を示すことができる説得力のある実践研究を望む。良いノートは見られたが、全体でどの程度の実現状況だったのかを数値化して示してほしい。